むさしかわらばん

第8号
発行 2016年12月5日
九州教区
東日本大震災対策小委員会

虹架けるプログラム
第9回親子短期保養プログラム in 奄美
東北教区放射能問題支援対策室いずみ　服部賢治さん

「ただちに健康に影響はない」という政府や有識者が連呼したフレーズをご記憶でしょうか？低線量の放射線被ばくであっても、数年、数十年という時間をかけて遺伝子や染色体の変性・変異性の細胞増殖を経て、急性ではない、晩発性の放射線障害が起きる可能性があります。あまり知られていませんが、全県の子ども、30万人以上を対象とした甲状腺検査を実施している、福島県「県民健康調査」の最新発表（2016年6月6日）では172人の子どもが小児甲状腺がん、あるいは悪性疑いと確認され、132人の子どもが手術を受けました。原発事故でまき散らされた放射能の影響ではない、と言い続けてきた福島県ですら「多発である」ということを認めざるをえない深刻な状況です。がんと告知され、施術を受けたひとりひとりの現実を直視する時、総数が何人だから「想定内」だ、「福島県は安全」というフレーズは、子どもたちに背負わせてしまった深い刻印の前には何の意味もありません。

震災直後から今もずっと、この国、とりわけ汚染地域の子どもたちは「これぐらいの放射能は大丈夫」と、震災前より20倍も被ばく基準を引き上げられた異常な環境下での生活を余儀なくされています。また、放射能の影響は人為的に線引きされた区域内だけではありません。放射性物質はあらゆる環境に入り込み夥しい汚染をもたらしましたが、法律や道義的枠外に置かれた被災地の子どもや保護者の方々は言葉にするのも困難な、想像を絶する日常を今も過ごされています。今、必要なのは、複雑な利害関係に縛られ過去や今に沈黙するのではなく、子どもたちの健やかな成長を見守る具体的な取組みです。保養はそのひとつです。今回初めて、九州教区奄美地区で実施できた第9回親子短期保養は虹が弧を描くように輝くすばらしいものでした。

到着後すぐ　奄美空港にて

3月28日から4月1日まで、4泊5日のプログラムは、奄美地区の諸教会や九州教区東日本大震災対策小委員会の全面的なご支援を受け、福島県内から6家族、宮城県内から1家族、お母さん7名、子ども13名の計20名の親子が参加しました。私は引率の一人として同行しました。

「ようこそみなさん」というお手製の厚紙を持った実行委員にお迎えいただいてから、見えなくなるまでずーっと手を振り見送ってくれたあっという間の5日間でした。真っ青な遠浅の海岸での水遊びやサンゴ礁観察、ガジュマルの原生林の中でのカヌー体験など、参加者親子は放射能の心配をせずおもいっきりあそび、身体と心を開放し過ごすことができました。3日目、瀬戸内教会での夕食会では、参加者の女の子の誕生日をみんなで祝福しました。今年8才になる女の子は震災当時2才、直後の誕生日は避難先で、2012年以降は春休みなので毎年、保養先で過ごしていたそうです。このご家族は誕生日に一緒にいること、祝うことすらできないことが日常になっていました。放射能に汚染された被災地では砂場や川や海で遊べないことなど、今なお、誰もが経験するような当たり前のことができません。「3・11」以降、安全な空気や水、土など、自然とのつながりを断ち切られ、埋めようのない不安を感じられている参加者

あやまる岬公園となりの砂浜にて

親子にとって、奄美保養は、世界や他者への希望・信頼を取り戻してもらえるかけがえのない機会になりました。原子力災害という人災により奪われたものは無数にありますが、人の力によって再び、美しい海や穏やかな時間流れる奄美への結びつきを築いてくれたこのプログラムを子どもたちやお母さんたちはきっと忘れないでしょう。参加者・スタッフの垣根を越え、笑顔が溢れ、心いっぱいに喜びを感じる日々でした。

この5年間、被災地で苦しむ方々を覚え、祈りつづけて下った方々がいなければこのプログラムは実現しませんでした。教区や奄美地区の実行委員、教会員のみなさま、保養のために献金をお寄せいただいたみなさま、ご協力いただいたお一人お一人に心より感謝申し上げます。

震災から5年経ちましたが、放射能汚染は自然減衰を待つほかなく、福島原発事故の終束自体も程遠い状況です。にも拘らず、被災者同士が分断しあうような複雑な状況があり、風化が加速する中、被災地では一層厳しい状況が今後も続きます。距離は遠く離れていますが、小さな生命の灯を護る人々への祈りとお支えをこれからもよろしくお願いいたします。

保養プログラム参加者の声

I さん

初めての保養プログラムへの参加に、少々緊張もありましたが、スタッフの方々の明るさに、その緊張もすぐになくなり、心から笑い、遊び、学べた5日間となりました。

また、わかちあいの時間には、原発事故からのそれぞれの状況を聞く機会となり、その深刻さに心が押しつぶされそうでした。

しかし、どこに解決の糸口があるのか・・・一人一人の状況や考えが違うなか、私達はどうやって乗り切れば良いのか・・・。考えても考えても、家族みんなが幸せで、納得できる答えがなかなか見つからない。

この様な生活が続いて5年。そんな中、この保養プログラムの中での子供達は、伸び伸びと夢中になって遊んでいた姿にとても嬉しくなりました。

そして、それぞれの子供をありのままに受け入れて下さるスタッフの皆様の姿に感銘しておりました。

女の子達がネックレスを作るアイディアには、子供なりの「何かをして喜んでもらえたら・・・」という気持ちが自然にわいたのだと思いました。

奄美大島の雄大な自然の営みの完璧さに感動し、また、伝統の中にある生活の知恵には、自然と人間のすばらしい共存に感動しました。と、同時に、不自然な生き方ということもしみじみと考えていました。

自然の雄大さに包まれ、スタッフの方々はじめ、島で出会った人々のあたたかさに触れ、この旅で感じたこと全てが、これから先何かの折にずっと心の糧となっていく私の財産となりました。

スタッフの皆様のたくさんのご配慮、ありがとうございました。また、すばらしいプログラムを作って頂いたこと（ちょこちょことサプライズの仕込みがステキでした）感激の連続でした。

無事に5日間を終え、東京駅でみなさんと笑顔でそれぞれの帰路へつき、またいつか笑顔で再会できることを願っています。

K さん

今回、奄美大島での保養に参加させていただき、本当にありがとうございました。

子供たちが海に向かって駆け出していく姿は、強く印象に残っております。

わたしの子どもは7歳にして初めて、海に入ることができました。時間を忘れ、貝殻ひろいに夢中になっている姿、「ママ！こんな貝殻が

上から　・名瀬教会でのミニゲーム
・水中観光船でサンゴ礁を見る
・加計呂麻島に接岸
・諸鈍小・中学校にて

あったよ！すごいでしょ！」と、目をキラキラさせて喜ぶ姿、箱めがねでひたすら海を覗いている姿、「海の水、すごくしょっぱかったよ！」と興奮気味に話す姿、そんな姿を見て、わたしもすごく嬉しかったです。そしていつの間にかわたしも、貝殻を見つけるのに夢中になっていました。

二人力を合わせてカヌーを漕ぎ、マングローブから命のパワーをいただきました。水中観光船では、サンゴ礁や魚たちが見渡す限りに広がっていて感動でした。がじゅまるの木に登ったり、ぶら下がったり。藍染めでは、家族三人お揃いの、想い出深いステキなTシャツが出来ました。

一緒に参加者した皆さんとお話しできたことは、この5年間何があって、どのような思いでいたかなどを分かち合うことができ、とても良かったです。

加計呂麻島で浜遊び

今回の保養で、数えきれない宝物ができました。保養にあたり、何か月も前から、たくさんの準備があったことと思います。スタッフの皆さんは笑顔であたたかく迎えてくださり、私たちの心に寄り添ってくださいました。心の温かさに触れ、奄美の温暖な気候とのんびりとした空気感に身も心も安らぎ、リフレッシュできました。奄美大島での体験は、財産です。

放射能という見えない不安の中ですが、今ある幸せを大切にしながら、歩んでいきたいと思います。どれだけ感謝をしても足りません。このような貴重な機会を与えてくださったことに、深く感謝いたします。

本当に、本当にありがとうございました。

ボランティア報告

吉永郁子さん
（佐世保比良町教会）

「運命」という交響曲があります。あの出だしの旋律は有名です。その旋律に誘われてこの曲を最後まで聴いてみると、私の好きなところは後の楽章です。何かに出会ってもっと近付いてみると初めの出会いの感じとは違う思いを味わう事がありますね。

２０１５年11月3日～7日までの5日間、東日本津波地震被害の地、仙台荒浜地区のボランティアをさせて頂きました。私の最近の大きな関心は被災された方々の事ではなく福島第一原発事故後の処理のゆくえでした。原子力発電には反対でしたので、そんなものを作るから、こんなとんでもない状況になり、片づけ方のマニュアルも無いから右往左往している間にも放射能は拡散し、たれ流されてしまうのだ、いったいどうするのですか?と。そしてこの事態を引き起こして原発を止めるなら今しかないはずなのに、地元の人々をはじめ、気付いた人々、今から子育てをする人々は反対の表明をしているのに再稼働に踏みきる事に決定を出す人がおられる。私の頭の中は「?」マークでした。

そんな時、ふとボランティアを募集しておられる事を耳にし、行ってみようと思ったのでした。時間があり体調も回復してきたので、何かできる事があるのなら体を動かしてみようと。東北教区センターの一部にエマオというボランティアの拠点があってスタッフの方々とボランティアの方々が津波震災後から数々の地元の方との共同作業みたいな形が繋がって今に至っていると思いますが、それがあって私達も突然出向いて受け入れて下さると思います。エマオの働きもこれから祈って支えていかなければいけないと思います。

私が行った時にボランティアとして御一緒したのは東京の保育士さん3人と学生2人の方々でした。荒浜地区の仮設住宅に出向いて、まずラジオ体操で体を動かしました。高齢の方は椅子にすわって動いておられました。その後お昼の食事を弁当として教区の教会婦人の方々が手作りされたものを持参したり、仮設の炊事場で作ったりして、一緒に頂きました。自称肉嫌いという婦人が弁当の肉団子を食べられるという楽しい光景も目にしました。皆で食べると日頃口にしないものも入っていくのでしょうね。その後はおしゃべりや時には歌も出たりしました。又被災された方の畑の草取りやビニールハウスの付け替えの手伝いもしました。私にとって無理な仕事は一つもありませんでした。

私がおしゃべりを聴いていて感じた事は、皆さまのお気持ちの復興はまだまだの段階だという事です。新しい住居に移ってしまうと顔なじみの方々と離れなければなりません。子供さんの御家庭に同居する方も昼間は一人になってしまうという事です。新たな不安を抱えるようになるのです。その他一人ひとり違った問題を抱えておられる様でした。私は自宅に帰ってきて家庭や住み慣れた風景に囲まれ、又顔なじみの人々に癒やされて過ごしている事に気づかされました。

これを読まれた方の中で時間と体力と少しばかりのお金のある方はどうぞボランティアに行ってみられませんか。

支援活動なう

◆約1年ぶりに、『しんさいかわらばん』を発行いたします。掲載しました原稿は、本年夏までにお預かりしていました。発行が大幅に遅れましたことをまずお詫び申し上げます。

◆２０１６年度は、年度が始まってすぐ、4月14日に熊本・大分で震度7を観測する地震が起こり、以後いわゆる本震でもう一度震度7、更に余震が起こり続けて今も終息したとは言えない状態が続いています。九州に暮らすわたしたちが、今、被災の只中に置かれて、東日本大震災の被災者の方々のことがいよいよ他人事には思えなくなりました。5月に開催された教区総会には、各地から多くの御見舞いの言葉が寄せられましたが、特に東日本大震災の被災教区から、心のこもったご挨拶をいただきました。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです」（第一コリント12章26節）の言葉が思い出されます。

◆２０１５年度の活動について、まずご報告します。

〈現地派遣〉

東北教区被災者支援センター・エマオに計4名を派遣。1名につき5万円を活動費補助として支給した。

〈被災教区直接支援〉

奥羽教区内被災4教会（大船渡、宮古、新生釜石、千厩）の経常会計支援として合計40万円。

東北教区被災者支援センター・エマオのスタッフ研修のための指定献金として20万円。

東北教区放射能問題支援対策室いずみに献金として10万円。

会津放射能情報センターに献金として10万円。

〈東日本大震災報告集会〉

２０１５年11月23日、徳之島伝道所を会場として、実施しました。講師は東北教区放射能問題支援対策室いずみ運営委員長の布田秀治さん、テーマは「地球という星は未来の子どもの家」でした。

〈印刷物の刊行〉

『しんさいかわらばん』の6号と7号を発行。また、「東日本大震災『5年』を覚えてのリタニー」を作成しました。

〈保養プログラムの実施〉

２０１６年3月28日～4月1日、奄美に7組20名の親子をお招きして保養プログラムを実施しました。詳細は、どうぞ、本紙の1～3ページをご覧下さい。なお、このプログラムは奄美地区と東北教区放射能問題支援対策室いずみと共催で実施しました。

◆２０１５年度にお寄せいただいた支援献金の総額は、１、０６０、３４４円でした。特に、保養プログラム実施のために、ご協力をいただき、ありがとうございました。２０１６年度に2、１４６、４０９万円の繰り越しとなりました。

◆今年度、左記のようにセクシュアル・ハラスメント対策特設委員会と合同で「東日本大震災『6年』を覚える集会」と「第15回九州教区セクシュアル・ハラスメント公開研修会」を合わせて実施します。

　まもなく6年を迎える東日本大震災現場からお話を伺い、非日常で多発するセクシュアル・ハラスメントの実態についてもお話いただく予定です。

日時：3月13日（月）午後3時～
場所：九州キリスト教会館4階
講師：片岡輝美さん（会津放射能情報センター）

◆日本基督教団東日本大震災救援対策本部がその働きを閉じる中、被災教区は、なお震災は終息していないという意識のもとに働きを続けておられます。

　特に東北教区は、被災者支援センターエマオの仙台と石巻での働きを、力量に見合うように規模を縮小させながらも、少なくとも２０１９年3月末までは継続させることを決めておられます。仙台では、長らく続けてきた笹屋敷地域で農業支援ワークはこの9月で終結し、「仮設支援ワーク」は「元仮設入居者支援ワーク」へとその働きをシフトさせています。石巻では、なお残っている仮設団地のうち、8つに関わっています。

「仮設の最後まで」が合言葉です。

　今後、重要になってくるのが、放射能問題支援対策室いずみの働きです。事故後5年半を経て、こどもたちの健康への影響が益々心配される時期に入っています。財政的な課題はありますが、とりわけ重要とされる保養プログラムを何らかの形で、継続したいと願っておられます。

　東北教区のこれらの働きを支えるために是非、祈りつつお献げいただきたく思います。東北教区「東日本大震災救援を続けるための全国募金」は左のとおりです。

郵便振替口座番号：
　０２２２０－５－１３７６８１
加入者名：日本基督教団東北教区
（なお、送金される場合は「A　会堂・牧師館再建復興貸付金返済のために」と「B　エマオ・いずみの働きのために」の別を明記ください。）

◆東日本大震災対策小委員会は、これらの動きに対応しつつ、働きを継続していきたいと願っています。お預かりしている２００万円あまりの献金を用い、被災教区への直接支援を継続し、保養プログラムを今一度、２０１８年春に実施できないかと模索しています。

保養プログラム参加者のお一人から届けられた色紙